

〈論 文〉

発話動詞「いう」と「はなす」の相違に関する一考察
—発話主体と発話相手の特定性をめぐって—

南 紅花[†] (東京外国語大学大学院総合国際学研究科)

A Study on the Difference between speaking verbs "iu" and "hanasu"
—On the specificity of the speaking subject and the speaking partner—

NAN HONGHUA (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード: 発話動詞 発話主体 発話相手 特定性

Key words: speaking verbs, speaking subject, speaking partner, specificity

要旨: 本稿では、発話活動を表す「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性を手掛かりにしてその相違点を探り、動詞「いう」が発話活動以外のことを表している際に、発話主体と発話相手の特定性がどう関わっているのかを明らかにした。「いう」は「はなす」と異なって発話主体と発話相手が存在しない場合が最も多く、さらに“発話する”という語彙的な意味が希薄化し、動詞らしさが失われ、文法的な働きを担うようになっていることが分かった。

Abstract: In this paper, I investigated the difference between the “iu” and “hanasu,” which expresses an utterance activity with specificity of the speaking subject and the speaking partner as a clue. Unlike “hanasu,” there are a lot of cases where “iu” is the speaking subject and the speaking partner does not exist. Here, the lexical meaning of “speak” is diluted, its function as a verb is lost, and it is assumed to take grammatical function.

原稿受理日 (2019-10-01)

査読後掲載決定日 (2020-01-09)

日本研究教育年報 2020, Vol. 24, pp. 56-74. ISSN 2433-8923



[†] 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CCBY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

現代日本語の動詞には、さまざまな意味的タイプの動詞が存在し、その中には言語活動を表す一群の動詞がある。その中で発話を表す動詞「いう」と「はなす」は次例のように主に“発話する”という語彙的な意味で使うことができる。

- ① 「文句は言わないこと」…私に背を向けたまま、彼は再び大声で言った。(アマゾンの白い酋長)
- ② 「本当に色々とありがとうございました」と礼を言った。(臨床に吹く風)
- ③ 「ふーん、そんなことがあったんだ」次の日の朝、ふぶきはちさととお友達になったことを花子に話した。(アーケードゲーマーふぶき)
- ④ ある日、そんなまさに夢のような私の構想を、ミッキーに話してみました。(ゾウが泣いた日)

しかし、動詞「いう」は典型的な発話活動を表す動詞であるにも関わらず、次のような発話活動以外を表す様々な場合が多く存在し、このことは「はなす」と異なる特徴である。

- ⑤ ユーカラでは、人が死ぬと…西に昇天した魂は再びこの地上にもどることはできない、などという話が語られている。(梅原猛著作集)
- ⑥ しかし、約百五十年前、移民たちが持ち込んだ犬やネズミなどの外来種が卵やひなを襲い、在来の鳥類は絶滅の危機に見舞われたという。(読売新聞)

本稿では、同じ発話動詞である「いう」と「はなす」の類似点と相違点を比較しながら、動詞「いう」がどのような条件の下で発話動詞以外のことを表しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

発話動詞「いう」と「はなす」の相違に関する研究は筆者が探した限り見当たらなかった。そこで、類語辞典類で言及されている「いう」と「はなす」の相違点について紹介する。

ア 森田良行 (1977) 『基礎日本語1 意味と使い方』角川書店 pp.58～59

森田 (1977) では、「いう」と他の言語活動を表す動詞の間で比較を行っている。森田 (1977 : 58～59) では「言う」は、ある事柄を音声や言語の形で表すことである。それが時には音声として形を成し、文字で表され、時には“ただある概念として意味される”“ある名称として名付けられる”漠然とした表現行為、表現作用となる」としている。一方「話す」は「あるまとまった内容の事柄を述べる行為であり、「音声による口頭言語に限られる」と指摘している。

イ 大野晋・浜西正人 (編) (1985) 『類語国語辞典』角川書房 p.518、p.1125

¹ 「いう」と「はなす」の表記については、特に断りのない限り、平仮名表記を使う。表記による意味的な違いがあるとは思いますが、本稿では、表記と意味との関係を論じるものではないため、表記を平仮名表記で統一する。なお、引用した部分では原文のまま表記する。

この辞典では、「いう」と「はなす」を【発言】類に分類し、以下のように用例と説明を用いて区別している。

言う：「人の一ことを聞く。」「泣き事を一。」

心に思うことを口で言葉に表す。

話す：「一部始終を一。」「英語で一。」

(まとまった意味内容を) 声に出して言う。

そして、「いう」には、ほとんど具体的な意味を表さないで、それと同類のものであることを示す用法があるとし、多くは「貧乏というものはつらい」のような「と」に付いて使用されていると指摘している (p.518)。「いう」と「はなす」の相違点として、「言う」は、必ずしも相手を意識しなくてもよいが、「話す」は、相手を意識した行為である」 (p.518) と述べている。

また、「発言」類とは別として、【名称】類としても「いう」が挙げられている。「木村と一人が来た。」「この植物を何とか。」の用例を挙げ、「名を付ける」との意味であるとしている。

ウ 田忠魁・泉原省三・金相順 (編) (1998) 『類義語使い分け辞典ー日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』 研究社 p.66

この辞典では、主に「言う・話す・述べる」などの言語活動の類似点と相違点について述べている。その中で、「いう」と「はなす」について以下のように区別している。

言う：意味のない1つの音声から長い文章まで、音声ができる・音声を出す。

話す：会話の全体・まとまりのある長い文章を、相手を意識して声に出す。

また、「いう」は「相手がいなくても使うことができ」、「相手がいても一方的な発言を意味し」、「話す」は、互いに理解したり何か一致する点を見つけるための言葉による伝達活動」であると指摘している (p.66)。

エ 柴田武・山田進 (編) (2002) 『類語大辞典』 講談社 p.282、p.309、p.633、p.1276、p.292、p.302

この辞典では、「いう」と「はなす」について、語彙的な意味の違いによって以下のように分類されている。

言う：【言う】類ー言葉や音声を口から出す。 (p.282)

「あの人はいつも文句ばかり言っている」「彼は突然、あつと言って立ち止まった」

【名乗る】類ーそのような名前・身分・所属である、あるいは自分についてそのようなことがあると、言葉で表明する。 (p.309)

「その店で彼女は、源氏名を昔の名前に戻して、忍と言っていた」

「受付に行って、お名前を言ってください」

【与える】類ー人や事柄などをそのように名付ける。 (p.633)

「人は彼女を天使と～」

【鳴る】類ー物が音を発する。 (p.1276)

「強い風で一晩中、雨戸ががたがたいていた」

話す：【しゃべる】類—ある言語の共通語や方言を使う。（p.292）

「英語を～」 「大阪弁を～」

【話す】類—自分が有するまとまりのある情報を聞き手に伝えるため、その内容を言葉を使って表出する。（p.302）

「先生に事情を話して、わかってもらう」

オ 小学館辞典編集部（編）（2003）『使い方の分かる 類語例解辞典 新装版』小学館 pp.683～684

この辞典では、「いう」と「はなす」を【発言】類に分類して、以下のような用例を挙げながら区別している。（p.683、一部改編）

	大声で～	鋭い意見を～	英語を～	自分の過去を～	思わず「あっ」と～
言う	○	○	—	—	○
話す	○	△	○	○	—

「いう」と「はなす」の使い分けについては、「言う」は、思ったことを言葉で表現する意だが、まとまった内容を表現する場合だけではなく、反射的に小さな叫び声を上げるような場合や文章表現などにも用いられ、広い用法をもつ語」（p.683）であるのに対して、「はなす」には「相手と会話をするという意」（p.684）をもつ語であると述べている。

カ 中村明（編）（2015）『新明解類語辞典』三省堂 pp.921～922

この辞典でも、「いう」と「はなす」を【発言】類に分類して、以下のような説明と用例で区別している。

言う：まとまった内容や単語を声に出す。

「君の一ことを信じる」 「つべこべな」

話す：まとまった内容を言って伝える。

「今日のでき事を一」 「小声／英語で一」

上で述べた辞典類での記述をまとめると、「いう」と「はなす」の用法についてはそれぞれ述べているが、その相違点に関しては積極的に述べられていないとおもわれる。それに、「いう」の発話活動以外の用法についてはほとんど触れていない（森田（1977）と大野他（1985）には少し触れられている）。また、全ての辞典では「いう」と「はなす」は発話活動をあらわす動詞として認めているものの、発話活動が行われている際に、発話主体と発話相手が文中にどのように現れているのかについては言及していない。森田（1977）では、動詞「いう」は「ただある概念として意味される」場合と「ある名称

として名付けられる」場合が存在することを明示しており、「発話する」の語彙的な意味にずれが生じ、発話主体と発話相手が表示されにくくなることを示唆している。一方、動詞「話す」は「音声による口頭言語に限られる」と指摘しており、発話活動が必ず行われていることが含意され、発話活動の現場性が明らかであり、発話主体と発話相手が常に存在していることが示唆されていると考えられる。

また、特定性については、従来いろいろな研究で論じられているが、発話活動における発話主体と発話相手の特定性については言及されていない。

奥田靖雄(1960)は、を格の名詞と動詞との組み合わせについて述べられているものであるが、その中で発見を表す動詞である「みる」には、助動詞的なはたらきをする場合があると指摘し、「発見活動の主体を一般化することからはじまっている」(p.239)と述べている。

国立国語研究所(宮島達夫)(1972)では、動詞「よむ」の用法について述べている中で、「細川七段の名は、チヒロとよむ。」という用例をあげて、「だれが「よむ」のか、という、動作の主体はいまいになり、一般化される。」と指摘されている(p.650)。

そして、高橋太郎(1983)では、動詞の条件形の後置詞化を分析し、「条件形の動詞の脱動詞化は、動作主体の一般化にそのめばえをみる」とし、「動作主体が特定されず、無人称化し」、「あらわす動作が一般的である」と指摘している(p.306)。

上で述べたように、動詞が動詞らしさを捨て、文法的な機能を担うようになる、つまり「脱動詞化」していく際に、動作の主体が一般化されていることから始まっていると指摘されているが、積極的に特定性については述べられていない。したがって、本稿では、発話動詞「いう」が前節の用例⑤と⑥のように発話活動以外のことを表す際に、発話主体と発話相手の特定性が深く関係していると考えられる。

以上のことを踏まえて、動詞「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性に焦点をあて、発話動詞「いう」と「はなす」の相違点を探り、「いう」が発話活動以外のことを表す際に、その発話主体と発話相手の特定性がどのようになっているのかを考察する。

3. 研究対象と研究方法

3.1. 研究対象

本稿で扱う発話動詞「いう」と「はなす」の用例は、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使用し、検索アプリケーション「中納言」を利用し収集したものである。検索対象については、動詞「いう」は「コア」に、動詞「はなす」は「コア・非コア」²に設定し、検索ジャンルについては、両動詞とも「出版・新聞」「出版・雑誌」「出版・書籍」に設定した。そこから収集した用例をそれぞれランダムに1000例ずつ選んで、本稿の研究対象にする。

² 「はなす」の用例を収集する際に、検索対象を「コア」に設定し検索すると、用例が全部259例のみであり、「いう」の用例5051例と大きく異なる。それ故に、「はなす」の用例の検索対象を「コア・非コア」に設定した。

3.2. 研究方法

2節で述べたように、辞典類での「いう」と「はなす」の記述では文における要素に関する特定性に言及されていない。そこで本稿では、積極的に発話活動における発話主体と発話相手の特定性を取り上げ、動詞「いう」と「はなす」の類似点と相違点について論じることとする。発話主体と発話相手の特定性の判定に関しては、後述するⅠ～Ⅴのように基準を立てる。

なお、以下の例文の中では、下線や囲みを用いて文中の種々の要素をそれぞれ動詞、発話主体、発話相手、注意すべき成分で示す。さらに、例文の後ろに〔発話主体→発話相手〕で発話主体から発話相手に発話活動が行われていることを示す。→の方向は発話活動の伝達方向を表し、⇄は発話活動が相互で行われていることを表す。

Ⅰ、発話主体と発話相手を特定者としてみなす場合

A. 発話主体と発話相手が文中に現れている場合

- (1) マンションに着き、携帯から彼女に電話をすると、彼女はすぐに下に降りてきた。ジーンズにTシャツ、肩からポシェットを下げている。わたしは車に乗り込んできた彼女にいった。「そういった格好も似合うね」(小説宝石) [わたし→彼女]
- (2) 「どうしたんですか、有希さん。この家のことで、また何か訊きたいってのは…」 上坂光瑠はやや戸惑っているように、そう言った。有希は何も応えず、代わりに圭子が、前日有希が聞かされたのと同じ推理を上坂に話した。(恋霊館事件) [圭子→上坂]

上の用例(1)と(2)では、発話主体と発話相手はその文中に現れているので、このような場合の発話主体と発話相手は特定者として扱う。

B. 発話主体と発話相手、一方が文中に現れ、一方が前後の文脈に現れている場合

- (3) 「すごくうまいです、あ、おいしいです」ぼくは言う。「それはよかった」女はせりふを読むように言って、カウンターキッチンの内側にいく。(人生ベストテン) [ぼく→女]
- (4) あとで叱っておかなくてはならないと思いながら、ディキシ―はもう一つ気がかりだったことを話した。「塀を越えたのが昼でよかったわ。夜は危ないの。庭に虎を放すから」虎と聞いて少年は興味を示した顔になった。(三十路妻の淫性告白) [ディキシ―→少年]

上の用例(3、4)は発話主体が文中に現れ、発話相手が前後の文脈に現れている。こういう場合の発話主体と発話相手を特定者として扱う。また、下の用例(5)と(6)のように、発話主体が前後の文脈に現れ、発話相手が文中に現れている場合も同じく発話主体と発話相手を特定者として扱う。

- (5) 「明日はゆっくり休むといいわ。園主と源さんには言っといたげるから、あなたは何も気にしないで寝てなさいな」言われなくてもそうさせてもらいます、と僕は言った。(IN POCKET (月刊[文庫情報誌])) [僕→園主と源さん]

- (6) 無花果の木の下にいる彼を見つけた母親に、皇帝は一瞬躊躇ったのち、こう告げたという。(…)
そして、ベルティエに話す時のような厳しい口調で言うのだった。(ナポレオン)

[皇帝→ベルティエ]

C.発話主体と発話相手が文中に現れず、前後の文脈に現れている場合

- (7) 部屋に戻って間もなくだった。ノックの音で範子がドアをあけると、ホテルの従業員らしき女が二人立っている。何を言っているのかわからなかったが、相手をしていた範子が振り向いた。

(週刊朝日)

[ホテルの従業員らしき女が二人→範子]

- (8) 社会科教師の私はどこへ行っても、宿の人にその地の生活を尋ねるのが常である。夕食の配膳に来た女性に、この地の日常生活を尋ねてみた。(…) 冬は雪に閉ざされ、集落への人の出入りはほとんどなく、陸の孤島になる(…)、と話してくれた。(熟年夫婦の味わい)

[夕食の配膳に来た女性→私]

上の用例(7、8)での発話主体と発話相手はいずれも文中で現れていないが、前後の文脈に現れている。このような場合も発話主体と発話相手を特定者として扱う。

D.発話主体と発話相手が入れ替わり、相互に発話活動が行われている場合

- (9) 私と同居人は売る側と作る側によりはっきり分かれて、お互いの領域に入らないようにし始めたのだ。それは共同経営者としての知恵だ。互いの領域に入っても、そこで働く人にとって私たちは個別にオーナーに違いなく、何げなく聞いたり言ったりした一言一句が、夕食後のひとときを経営会議に変えた。(走り終わって考える)

[わたし⇔同居人]

- (10) しかし、雪子のいるこのマンションは、女子学生専用で、深夜の出入りはやかましいのである。ということは、聖人が来ても、正面玄関からは入れてもらえない。(…)「今夜、お袋と話したんだ。君のことを、お袋も気に入ってるしね。気が変らない内に、婚約だけでもしておこう。どうだい？」(三毛猫ホームズの世紀末)

[聖人⇔お袋]

上の用例(9、10)では、発話主体と発話相手が相互に発話活動を行い、発話主体と発話相手という立場が入れ替わることが発生する。発話主体や発話相手は共同行為を表す「〜と」で表示されており、動詞にも“話し合う”のような意味が帯びてくる。このような場合も発話主体と発話相手を特定者として扱う。

E. 発話主体と発話相手のうち、一方が文中や前後の文脈に現れ、一方が現れていないが前後の文脈から読み取れる場合

- (11) ひとりで働き、ひとりで子育てする。産むと決心した時は、その覚悟がちゃんとできていたはずなのに、再び不安でたまらなくなる。あ…。協子は思わずお腹に手をやった。子供が暴れている。手と足をばたばたさせて、協子のお腹の内側を叩いている。抗議のように思えた。今更、

何を言っている。何を迷っている。協子はお腹をさすりながら、子供に声を掛けた。ごめんね、弱気なことを考えて。(青春と読書) [協子→協子]

(12) そういえば結婚以来、体調が悪い。もうこんな悪事をほっておくことはできない。(…)それが無理な場合は、歯磨きをやめ、自分の下着はせめて犬用の毛布と一緒に洗おうではないか。女のひどさを妻に話すと、妻は少しも驚かず、「男はみんな、心の底では自分だけは違うと考えてるのよね」とつぶやいた。(週刊文春) [筆者→妻]

上の用例(11)では、「協子」が一人で子育てをするのに不安を感じ、弱気なことをいってしまったことを表しているが、ここでは、文脈からは発話相手が現れていないが、「協子」が自分に発話したことであると推測できる。また用例(12)では、「女のひどさを妻に話す」という状況を表しているが、発話相手は「妻」であることが明確であり、発話主体は明示されていなかったが、夫である「筆者」であることが推測できる。したがって、用例(11、12)のような前後の文脈から発話主体や発話相手が推測できる場合は、特定者として認める。

また、以下のような新聞記事(用例13、14)やインタビュー(用例15、16)の内容を示している場合で、発話主体のほうは文中や文脈の中ではっきり示されているが、発話相手に関しては明示されていない。しかし、新聞記事もインタビュー等を基にして作成されており、インタビューされる側の人間(発話主体)が存在すれば、インタビューする側の人、即ち記者(発話相手)が存在するはずである。したがって、このような場合は発話相手が「記者」とみ、発話主体と発話相手を特定者として扱う。

(13) GK 李雲在は、フェイントにも動じず、ほとんど動かない。左にきたボールをはじき出すと、スタジアムは地響きのような歓声に包まれた。PKセーブは得意だ。「2本くらいは止める自信があった」という。(西日本新聞) [GK 李雲在→記者]

(14) 議員連盟幹事長で大日本獐友会顧問の宮路和明衆院議員は「農林業被害は全国各地で深刻化している。狩猟免許を持つ人は減り続けており、対策が必要だ」と話す。(西日本新聞) [宮路和明衆院議員→記者]

(15) この日も4アンダーと快走した。「予定通りのスコアなので満足している」と宮里は言う。(西日本新聞) [宮里→記者]

(16) 「すべてが作画の段階で素材分けされていれば、後の作業は楽になります。ですが、絵を描く際にイメージがつかない」そのバランスを取ることが重要だと奥井さんは話した。(The art of spirited away) [奥井さん→記者]

用例(13～16)はインタビューをもとにした場面である。用例(15)はゴルフ試合でのインタビューを示し、用例(16)では雑誌でのインタビューを示している。いずれも、発話主体が特定できる人である。また、以下の「はなす」用例では、同じ新聞記事であるが、発話主体が人名詞ではなく、組織

(用例 17、18) を表す名詞である。このような場合は、発話活動を行っている人がその組織の担当者であると読み取れるので、この場合も特定者として認める。

(17) 「ポイント制にしたことで、一般ユーザーにまで参加を拡大することができた」と、NTT 西日本は話す。(YOMIURI PC) [NTT 西日本の関係者→記者]

(18) 京都府神社庁は「鎮守の森の落ち葉をごみと見なす考えはこれまで神社になく、落ち葉処理を業者に委託すれば費用もかかる。経済力が弱い神社も多く、大変、頭の痛い問題だ。周辺住民の理解を得ながら、今後の対応について検討していく必要がある」と話している。(京都新聞)
[京都府神社庁の関係者→記者]

一方、以下の用例 (19、20) は、「いう」の例であるが、発話主体が「～によれば」という形で示されていて、情報の出所を示している。

(19) 張学良氏の死の前年にもハワイの自宅に張学良氏を見舞ったという陳教授によれば、張学良氏は戦後、台湾で自宅軟禁されていた間もずっと「西安事件については聞かないでくれ。話せば人を傷つけることになる」と言い続けていたという。(産経新聞) [陳教授→記者]

(20) 関係者によると、冒頭、大社啓二社長が「会社の経営を傾かせ、責任を痛感しております」と頭を下げた後、約四十分間報告を読み上げた。大社社長は途中で涙を流しながら「食肉事業は会長と東（平八郎）副社長らに預けていた気持ちだった。落とし穴に落ちたような気持ち」と無念さをにじませたという。(毎日新聞) [関係者→記者]

F. 発話相手は文中や文脈から読み取れ、発話相手は多数である場合

この場合は、主に授業や講演会などのような多くの人の前で発話活動を行う公的な場面でよく見られる。発話主体は文中や文脈に示されているが、発話相手は「子供たち」「みんな」等のような多数を表す人名詞であり、発話活動が行われている場所に存在している共通点を持っている。こういう場合の発話相手も特定できると考えられ、発話主体と発話相手を特定者として認める。

(21) ゲームを始めると、子どもたちはもう夢中で取り組みはじめました。第一回目からおおいに盛り上がりました。チャイムが鳴ったので、「きょうの勉強、これで終わります」と言っても、やめようとしません。「先生、もっとやらせて」と要求してきます。(授業力)
[先生→子供たち]

(22) そう、あの頃、俺たちの親分は澁澤龍彦。学術的な親分っていうのかな。澁澤先生の言うことはみんなじーっと聞いてた。(現代) [澁澤先生→みんな]

(23) ファラデーは(…)千八百二十五年から始められた一般向けの「金曜講演」で、何度も講演し、最後の講演で子どもたちに話した内容をもとに、『ろうそくの科学』が著わされたことでも有名です。(理科ができる子の育て方) [ファラデー→子供たち]

(24) わたしは松野一郎と言います。自然公園で、みなさんに草花の説明をしています。今日はみなさんに春の七草についてお話しして、その後、校庭や学校のまわりの畑や田んぼをまわって、探してみしょう。(東洋鬼) [松野一郎→みなさん]

上の用例(21)では、授業中に「先生が子どもたちにいう」場面、用例(22)では「澁澤龍彦先生がみんなに学術的なことをいう」場面を示し、用例(23)では講演会の場面を、用例(24)では説明会などのような場面を示している。いずれも発話相手が発話活動の行われている場所に存在する集団を表している。それ故、特定者として扱う。

一方、以下の用例(25、26)のような、紙を媒体にして発話活動を表している場合、音声を伴った言語活動とは異なる一種の言語活動として認め、さらに紙を通して発話することとして認める。したがって、発話主体は筆者で、発話相手は読み手の読者であるといえる。発話相手の読者は、本を読む集団であり、上述の用例(21～24)と同様に言語活動に参加しているとみて、同様に扱う。

(25) 生きるためには食事をしなくてはならないのと一緒に、何かものごとを考えるためには、「前提」は必要で、むしろその持ち方がもしかしたら「あなた自身」なのかもしれない。前提は捨てるべきではないが、もしそれがあなたを苦しめるようなことがあるとき、変えることが可能だ、と言っているのだ。(逆18禁) [筆者→あなた(読者)]

(26) ここで自分自身のことで恐縮ですが、つい最近の筆者の経験をお話しさせていただきたいと思います。(教育改革への哲学的視点) [筆者→読者]

II、発話主体を特定者、発話相手を不特定者としてみなす場合

発話主体が前節Iで述べたような特定者であるが、発話相手が特定できない不特定者である場合である。

まず、下の「いう」の用例(用例27、28)であるが、発話主体はいずれも文中や文脈に現れている。しかし発話相手は、文中や文脈に現れておらず、さらに前後の文脈からも読み取れない。ただし、発話活動が行われていることは明確であり、発話相手も特定できないが確かに存在する。したがって、こういう場合は発話主体が特定者、発話相手が不特定者として扱う。発話活動も一回のみではなく、数回行われていると考えられる。「はなす」の用例(29、30)も同じく解釈できる。

(27) 日本ではバリデーションの普及は遅れたが、東京都老人総合研究所の本間昭研究部長は「痴呆のお年寄りのいうことを否定しないで共感するなどの方法は日本でも熱心な介護者は実践してきた」と指摘する。(読売新聞) [お年寄り→○³]

(28) 人間が現在生きていることが、目で見ていることです。人間の魂の働きが、目の働きと同じ働きをしているのです。生きていること全体が、舌で味わっていることも、耳で聞いていることも、手で触っていることも、全部見ていることです。目は体のランプであるとイエスが言っていますが、皆様の魂が、皆様の命全体のランプになるのです。(とこしえの命を得るために)

[イエス→○]

³ 発話主体や発話相手が不特定者で存在する場合は○で示し、後節で扱う発話主体と発話相手が存在しない場合は×で示す。

(29) 原爆のときは、そういうことが突然に起こった。いつものような平和なときの自分の思いは通用しないということを身にしみて感じたのです。広島でもおなじだと思いますが、被爆者としての経験をした人はやはりそういうことを話したくないのです。(凜として看護)

[被爆者としての経験をした人→○]

(30) 話し言葉の脳メカニズムは、次のようになる。われわれが話そうと思う発話内容は左右大脳半球のいろいろな部分をつかって形成される。(言語と脳) [われわれ→○]

そして、以下の用例 (31、32) のように、「言語名+を+はなす」という構文を成し、且つ発話主体が「全バスク人口の五十四パーセントの人」や「日本人の子ども」のようなある限定された集団をなしている場合、発話相手が存在するが、特定できないため不特定者として認める。

(31) 千八百六十八年の調査によれば、全バスク人口の五十四パーセントがバスク語を話し、その普及が最も進んだギブスコアでは百パーセント、ビスカヤでは九十三パーセントの数字がある。

(バスクとバスク人)

[全バスク人口の五十四パーセントの人→○]

(32) 日本人の子どもであっても、生まれたときからフランスで育てられればフランス語を話すようになることから、日本語とかフランス語といった個別言語と言語能力を区別する必要があることは容易にわかるだろう。 [日本人の子ども→○]

Ⅲ、発話主体を不特定者、発話相手を特定者としてみなす場合

発話主体が不特定者で、発話相手がⅠ、節で述べたような特定者である場合であるが、今回の調査では、このような場合の用例は見つからなかった。用例が見つからなかったというのは、そもそもこのような使い方がないか、それとも用例の数が少なかったのかは現段階でははっきり言えない。この理由に関しては、今後の課題としたい。

Ⅳ、発話主体と発話相手を不特定者としてみなす場合

発話主体と発話相手が特定できない不特定者である場合である。この場合はすべて「はなす」の用例である。

以下の「はなす」の用例 (33～35) では、発話主体と発話相手が特定できない。動詞「はなす」が一つのまとまった動作として現れ、誰が誰に話したのかを問題にしない。これらの用例は「はなすこと」という形でしめされているが、ここからも「はなす」が一つの動作として認識されていることがわかる。したがって、このような場合も発話活動が行われていることが伺え、発話主体と発話相手は存在すると考えられる。ただし、特定できないため、不特定者としてみなす。

(33) この意味で、話すこと・聞くことの力の育成は、学校教育全体の課題であり、この意味で、話すこと・聞くことの力の育成は、学校教育全体の課題であり、話すこと・聞くことの力は、どの子どもにとっても必要な生きる力である。(小四教育技術) [○→○]

(34) 家康は、村人は最後に自分たちの聞き違いだったということがわかって大笑いしたり落胆したりしたという。それゆえ、相手の考えに立って話すことが大切だと家康は言う。(歴史を動かした名言) [○→○]

(35) どれだけ努力しても、人は通常のスピードより3倍以上の速さで話すことはできない。それを機械の助けを借りて無理なく効果的に行えるようにしたのが速聴だ。(聴覚刺激で英語は必ず聞き取れる！) [○→○]

以下の用例(36、37)は、「はなすこと」という形として表れていないが、用例(33～35)のように「はなす」が一つのまとまった動作として表れている。発話主体と発話相手が誰なのかについては問題にならず、一般化されている。

(36) 発音が不明瞭ならばはっきり言わせる、声が小さければ、大きな声を出させる、何でも良いから読んだり、話したりという対症療法には限界がある。(言語聴覚士テキスト) [○→○]

(37) 心で語りかけましょう。そういう経験を重ねると、徐々に「話さなくても通じ合う」ようになるはず。(Hanako) [○→○]

また、下の用例(38、39)では、前で述べた「言語名+を+はなす」という構文を成しているが、前と異なって発話主体が特定できない。「者」と「人」で文中に現れているが、発話主体が一般化されており、不特定者であると考えられる。しかし、この場合も発話活動の進行がうかがえ、発話主体と発話相手は存在していると考えられる。

(38) 『ワット・アルン』に行けば、日本人社会に必ずつきまとってくるわずらわしさとは無縁でいられた。英語を話す者が多かったせいで、コミュニケーションには困らなかった。(古惑仔) [○→○]

(39) もし『真の』マルチリンガル(…)に育てたいなら、幼少期に母国語の他に外国語の環境にさらすことが必須となる。もちろん、ネイティブの外国語環境である。英語なら、ネイティブ英語を話す人が身近にいることがベター。(早期教育と脳) [○→○]

V、発話主体と発話相手が存在しない場合

この場合は、そもそも発話活動が行われていないため、発話主体と発話相手が存在しない。すべて「いう」の用例であるが、発話主体と発話相手は文中や文脈から読み取れず、発話活動が行われていない。

(40) 「必要な人に必要なサービスを」という社会保障の理念を達成する為に、保険制度によらざるを得ないのか、税によるべきなのか、国民的議論の早急な喚起が必要と思う。(障害者福祉制度改革なにが問題か) [×→×]

(41) 文面は日付入りの日記風で、「死ぬ理由はない。あえていえば。疲れたから」「生きてる理由はない」などと書かれていたという。(産経新聞) [×→×]

(42) その意味では、罪の意識というのは、感情でいえば「恐怖」「驚愕」「怒り」のすべてが入っているような気がします。(教育再生！) [×→×]

以上のような判定基準を基にして、動詞「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性について分析していく。次節から詳しくみていこう。

4. 分析結果

前節で述べた、研究対象である動詞「いう」と「はなす」のそれぞれ 1000 ずつである用例を研究方法で述べた特定性の判定基準に従って分類した結果、以下の表 1 のようにまとめられる。

表 1 発話動詞「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性の分布

発話主体	発話相手	いう		はなす	
特定者	特定者	306	30.6%	796	79.6%
特定者	不特定者	67	6.7%	162	16.2%
不特定者	特定者	0	0.0%	0	0.0%
不特定者	不特定者	0	0.0%	42	4.2%
不存在	不存在	627	62.7%	0	0.0%
計		1000	100.0%	1000	100.0%

次節から上の表 1 を基にして、動詞「いう」と「はなす」の語彙的な意味があるか否かという観点から詳しくみていこう。

4.1. I、発話主体が特定者、発話相手が特定者である場合

この節では、発話主体が特定者、発話相手が特定者である場合をみていく。発話主体と発話相手との両方が特定者である場合、「いう」が 306 例、「はなす」が 796 例で大きく異なる。

これらの用例は、すべて発話主体と発話相手が文中（用例 44、47）や文脈の中（用例 45、48）に明示されているか、或いは前後の文脈（用例 46、49）から読み取れる。いずれにしても、発話活動が行われている状況を示しており、発話の現場性が明確である。従って、動詞「いう」と「はなす」との“発話する”という語彙的な意味も読み取りやすい。

《「いう」》

(44) 「盆が過ぎたら泳ぐんじゃない」老人は、けん坊と私の前で厳しい目をして言ったものである。(五十メートルの戦記) [老人→けん坊と私]

(45) 夜、ユナから電話がかかってくる。「柚乃、元気ないね」話している途中でユナが言った。「うん」「どうしたの？」わたしは秀人にぬいぐるみをつっ返したことを話した。(天の前庭)

[ユナ→わたし]

(46=11 再掲) ひとりで働き、ひとりで子育てする。産むと決心した時は、その覚悟がちゃんとできていたはずなのに、再び不安でたまらなくなる。あ…。協子は思わずお腹に手をやった。子供が暴れている。手と足をばたばたさせて、協子のお腹の内側を叩いている。抗議のように思えた。今更、何を言っている。何を迷っている。協子はお腹をさすりながら、子供に声を掛けた。ごめんね、弱気なことを考えて。(青春と読書)

[協子→協子]

《「はなす」》

(47) 今、親元を離れ家賃三万二千円の部屋に暮らしていること、旅をして出会った人たちから教えてもらったこと、そのことを文にさせてもらい生活をしていることなどを、私はサチさんに話した。(島を旅する)

[私→サチさん]

(48) 「お待たせいたしました、黒巫女殿、どうかこうにか手当はできましたわい」相変わずの好色そうなしわがれ声で話しつつ、墨染めのぼろ衣をまとった猿鬼坊がやってきた。(退魔拳士フェイラン)

[猿鬼坊→黒巫女殿]

(49=12 再掲) そういえば結婚以来、体調が悪い。もうこんな悪事をほっておくことはできない。(…)それが無理な場合は、歯磨きをやめ、自分の下着はせめて犬用の毛布と一緒に洗おうではないか。女のひどさを妻に話すと、妻は少しも驚かず、「男はみんな、心の底では自分だけは違うと考えてるのよね」とつぶやいた。(週刊文春)

[筆者→妻]

4.2. II、発話主体が特定者、発話相手が不特定者である場合

この節では、発話主体が特定者、発話相手が不特定者である場合を考察する。発話主体が特定者で、発話相手が不特定者である場合は、「いう」が 67 例、「はなす」が 162 例で、前節と異なってそれほど大きな差が見られなかった。

これらの用例は、発話主体は文中や文脈から示されているか、それとも前後の文脈から読み取れる。しかし発話相手が誰なのかについて問題にしておらず、不特定者である。ただし、発話活動が行われていることは明確であり、発話相手も特定できないが存在する。

用例 (50、51) は「いう」の用例であり、用例 (52~54) は「はなす」の用例である。両者とも発話主体が文中に示され、発話相手が不特定者である。ただし、文脈から発話活動が行われていることが見られ、発話相手は特定できないが存在する。

《「いう」》

(50) 橋川文三から聞いたのは、彼は戦争中、保田与重郎に熱中しているわけですが、「保田さんは、『昔の日本には、間違ったことを聞いても、正しく聞く伝統があった』といった」という人です。(未来におきたいものは)

[保田さん→○]

(51=27 再掲) 日本ではバリデーションの普及は遅れたが、東京都老人総合研究所の本間昭研究部長は「痴呆のお年寄りのいうことを否定しないで共感するなどの方法は日本でも熱心な介護者は実践してきた」と指摘する。(読売新聞) [お年寄り→○]

《「はなす」》

(52) 日本人は特に表情を気にするようである。暗い表情、気むずかしい表情、怒気を含んだ表情、その他不快感をもたせる表情で話していないか、話し手の自己点検のポイントと考えてよい。(話力をつけるコツ) [日本人→○]

(53) オーストリアの研究でリンケは、子どもが書いているものと話していることとを比べたならば、七歳の子どもは二歳の子どもが話すのと同じ程度に書くことさえできないといえます。(子どもの想像力と創造) [二歳の子ども→○]

(54) 地中海東岸のトルコからアラビア半島、さらにイラン、アフガニスタンに至る西アジアに話される主要な現代語は、アルタイ系のトルコ語を除けば、大部分、セム系およびイラン系の言語である。(世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷) [西アジアの人→○]

4.3. IV、発話主体が不特定者、発話相手が不特定者である場合

この節では、発話主体が不特定者で、発話相手も不特定者である場合を見ていく。発話主体が不特定者で、発話相手も不特定者である場合は、すべて「はなす」の用例で、全部 42 例である。

前節にも少し述べてあるが、動詞「はなす」が一つのまとまった動作として現れる場合、誰が誰に話したのかは問題にしない。しかし、発話活動が行われていることが同え、発話主体と発話相手は存在すると考えられる。したがって、動詞「はなす」は“発話する”という語彙的な意味も保たれていると考えられる。

《「はなす」》

(55=37 再掲) 家康は、村人は最後に自分たちの聞き違いだったということがわかって大笑いしたり落胆したりしたという。それゆえ、相手の考えに立って話すことが大切だと家康は言う。(歴史を動かした名言) [○→○]

(56=41 再掲) 心で語りかけましょう。そういう経験を重ねると、徐々に「話さなくても通じ合う」ようになるはず。(Hanako) [○→○]

また、次の例 (57) のような「言語名+を+はなす」という構文をなしているが、このような場合も発話主体と発話相手が特定できず、一般化されている。

(57) 結果として、正確な英語を話さなければならないというプレッシャーを感じ、予期しない質問などを聞くと、どう対処してよいのかわからなくなっている。(オーラル・コミュニケーション・ストラテジー研究) [○→○]

4.4. V、発話主体と発話相手が存在しない場合

この節では、発話主体と発話相手が存在しない場合をみていく。この場合は、すべて「いう」の用例であるが、全部 627 例である。

以下の用例 (58～60) は動詞「いう」の連体修飾の働きをする用例である。用例 (58) では、“発話する”という語彙的な意味が失われており、「島原や天草、五島といったキリシタンの地」という「例示」的な役割を果たしている。用例 (59) では雑誌「『Judo』」の特徴を説明している役割を果たしている。「いう」と「いった」の対立も無くなっていると言える。一方、用例 (60) では「バングラッシーというジュース」という名づける働きを果たしている。このような用例は下の用例 (61、62) につながっているといえる。

《「いう」》

(58) 残念なことに竹田には、島原や天草、五島といった、他の九州の隠れキリシタンの地のようにその生活や信仰の様子を伝える資料がほとんど残っていない。(旅の手帖) [×→×]

(59) フランス柔道柔術連盟と有段者会共同の機関誌『Judo』が千九百五十年一月に創刊された。A五判よりすこし大きめで三十ページ少々というささやかな雑誌である。(世界にかけた七色の帯) [×→×]

(60) 肝心の祭りの当日は、インド人に振る舞われたバングラッシーという飲むと酔っぱらうお酒のようなジュースを飲んで眠りこけてしまい、気が付いたら祭りは終わっていてそのショックでガクッリ落ち込んで動けなくなってしまう、そのままバラナシに引っ掛かってしまったのだ。(インド) [×→×]

以下の用例は動詞「いう」が主節の述語の働きを果たす用例である。しかし発話活動を表しているのではなく、語彙的な意味にずれが発生している。用例 (61) では「命名する」という意味を帯びてくる。用例 (62) も「鉢上げしたのを松盆栽の発祥という」のように解釈でき、用例 (61) と同じく「命名する」という意味を帯びてくるといえる。ただし、用例 (62) は用例 (63) と同じく伝聞の助動詞「そうだ」に似ている役割を果たしているとも言える。「いう」と「いわれる」との対立もなくなる。

(61) まじめで、かげひなたがない人、誠実な人を、マメな人といいます。(語源を楽しむ) [×→×]

(62) 鬼無地区では、いたる所にこうした松養成畑が見られる。当初、五色台の山に自生していた松を掘り上げて鉢上げしたのが松盆栽の発祥と言われている。(農耕と園藝) [×→×]

(63) シェア 5 割を誇るナショナル自転車工業 (大阪) のブースにも、スポーツ車や折り畳み車が並ぶ。車種を増やすことで、様々な年代にアピール。山の坂道も楽に上れ、ツーリングの幅が広がるという。(朝日新聞) [×→×]

以下の用例は動詞「いう」が従属節の述語として働いている場合である。こういう場合は、動詞「いう」の条件節が引用を示す「〜と」とくみあわさって「〜という - 条件形」の形をとるのがほとんどである。ここでの「〜という - 条件形」は高橋（1983）で述べてある《立場のえらびだし》（下の用例 64、65）と《先行題目になる》（下の用例 66、67）という役割を果たしていると考えられる。したがって、動詞「いう」の条件節が後置詞⁴の役割を果たしているといえる。

(64) 逆に言うと、引き渡し後のメンテナンスサポート体制がなければエコハウスは実現しないとさえ感じています。（エコハウスに住みたい） [×→×]

(65) つまり、僕には、保坂さんの文体も、この言い方で言うなら、蓮實という人の批評の文体と同様、「全体として空疎である」、「情報量」が非常に少ないことに、その特徴がある、と思われるのです。（一冊の本） [×→×]

(66) 六十年あまり前の千九百四十三（昭和十八）年といえば、第二次世界大戦の敗色が次第に日本を覆い始めたころです。（中日新聞） [×→×]

(67) これまで柔道の試合といえば柔道クラブの道場か、せいぜい共済会館の小さな部屋で行われたので、よく見えないとか換気が悪いという前出のような苦情が出た。（世界にかけた七色の帯） [×→×]

5. まとめ

本稿では、言語活動を表す動詞「いう」と「はなす」を比較して分析した。「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性を手掛かりにして、「いう」と「はなす」の相違点を探り、動詞「いう」が発話活動以外のことを表している際に、発話主体と発話相手の特定性がそれぞれどのように成り立っているのかを明らかにした。

動詞「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性に大きな相違点がみられる。「いう」に関しては、発話主体と発話相手の両方が存在しない場合が最も多く、全体の 62.7%を占めているが、「はなす」はこの項目には用例がみられなかった。一方、「はなす」は発話主体と発話相手が特定者である場合が最も多かった（全体の 79.6%を占めている）。発話主体が不特定者で、発話相手が特定者である場合は、「いう」と「はなす」ともに用例が見つからなかった。そして、発話主体と発話相手が不特定者である場合、「いう」の用例も見られなかった。（表 1 参照）

語彙的な意味があるか否かという点からみても、動詞「いう」と「はなす」は異なる分布を示している。表にまとめると以下の表 2 のようになる。

⁴ 高橋（1983）は、「後置詞」を「単独では文の部分とならず、名詞の格の形とくみあわさって、その名詞に一定の構文的な機能をはたさせる役わりをになう補助的な単語」としている。本稿でもそれに従う。

表2 発話動詞「いう」と「はなす」の発話主体と発話相手の特定性と語彙的な意味の分布

発話主体	発話相手	いう	はなす
特定者	特定者	有	有
特定者	不特定者	有	有
不特定者	特定者	—	—
不特定者	不特定者	—	有
不存在	不存在	無	—

発話主体と発話相手の両方が特定者である場合、「いう」と「はなす」はいずれも“発話する”という語彙的な意味で用いられている。発話主体が特定者で、発話相手が不特定者である場合も、両者“発話する”という語彙的な意味がみられた。しかし、発話主体と発話相手が共に不特定者である場合は、動詞「はなす」のみ用例がみられた。発話主体と発話相手が特定できない不特定者であるが、文脈から発話活動が行われていることが伺える。一方、発話主体と発話相手が存在しない場合は、「いう」の用例のみであるが、動詞らしさが失われ、連体修飾の機能、助動詞の機能、後置詞の機能を果たし、もっぱら文法的な働きを担当している。動詞「いう」は「はなす」と異なって、発話対象と発話相手が一般化されているにつれ、「いう」は発話活動そのものが行われているか否かが問題にならず、そもそも発話活動が行われていないともいえる。したがって、「いう」の“発話する”という語彙的な意味が失われ、専ら文法的な機能を持つようになっていくといえるだろう。

動詞「いう」が動詞「はなす」とは異なって、発話活動以外のことも表しうることは、発話主体と発話相手の特定性に深くかかわっていることがわかった。動詞「いう」がどのように発話活動以外のことを表しているのかは今後の課題にする。

参考文献

- 奥田靖雄（1960）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』pp.151-279、（「編集にあたって」によると、1960年の研究会でのガリ版刷原稿が未公刊だったものを収録したものという）、むぎ書房
- 奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8、むぎ書房（松本泰丈編（1978）『日本語研究の方法』pp.29-44、川本茂雄他編（1979）『日本の言語学 第5巻 意味・語彙』pp.151-168、奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』pp.3-20に再録）
- 奥田靖雄（1968～1972）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、21、23、25、26、28、むぎ書房（言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』pp.22-149に再録）

⁵ 表2の中で、“発話する”という語彙的な意味が保たれている場合は「有」で、語彙的な意味が失われている場合は「無」で示す。

- 川端善明（1958）「接続と修飾－「連用」についての序説－」『国語国文』27-5、pp.38-64、京都大学文学部国語学国文学研究室
- 国立国語研究所（宮島達夫）（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所報告 43）秀英出版
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎（1983）「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実（編）『副用語の研究』pp.293-316、明治書院
（高橋太郎（1994）『動詞の研究－動詞の動詞らしさの発展と消失』pp.102-120 に再録）
- 高橋太郎（1987）「動詞（3）」『教育国語』90、pp.329-347、むぎ書房
- 高橋太郎（1994）『動詞の研究－動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
- 高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房
- 南紅花（2019）「動詞「いう」に関する一考察－内容語的用法から機能語的用法への移行－」『対照言語学研究』27、pp.29-44、海山文化研究所
- 松本泰丈（編）（1978）『日本語研究の方法』むぎ書房
- 宮島達夫（1983）「単語の本質と現象」『教育国語』74、むぎ書房（宮島達夫（1994）『語彙論研究』pp.95-112に再録）
- 宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房
- 村木新次郎（1996）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 村木新次郎（2010）「文の部分と品詞」『国語学解釈と鑑賞』75-7、pp.102-111、至文堂
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

辞典類

- 大野晋・浜西正人（編）（1985）『類語国語辞典』角川書房
- 柴田武・山田進（編）（2002）『類語大辞典』講談社
- 小学館辞典編集部（編）（2003）『使い方の分かる 類語例解辞典 新装版』小学館
- 田忠魁・泉原省三・金相順（編）（1998）『類義語使い分け辞典－日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』研究社
- 中村明（編）（2015）『新明解類語辞典』三省堂
- 森田良行（1977）『基礎日本語1－意味と使い方－』角川書店